



近江の彫刻

栗東町立歴史民俗博物館
館長 宇野 茂樹

近江に伝存する古彫像の数は非常に多く、国の指定を受けるものは奈良・京都に次いでその件数をかぞえることができます。しかも奈良・京都は都の所在した地域に蝟集していて、府県全般に亘って指定物件が所在するものではありません。しかし近江はどの市町村に行っても指定物件がないというところはなくそれが大きな特色です。これは平安初頭に最澄が比叡山上に天台宗の根本道場を設け、その教学が平安仏教を支配し、天台経済基盤を多く近江におき、そこに設けられた天台寺院の隆盛に伴うものに由来したからです。

しかし、近江の古彫像は平安時代からはじまるものではありません。白鳳・天平寺院址も非常に多く発掘によって知られており、伝世品こそ少ないが、廃寺から出土した塑像片や押出仏によって七・八世紀の遺像の片鱗を窺い知ることができます。塑像では雪野廃寺の塔本塑像が最も顕著なもので、そのほか石居廃寺・南滋賀廃寺などのものも見逃すことができず、近年出土した穴太廃寺の銀造押出仏も珍しいものです。

伝世白鳳仏は八日市市慈眼寺観音菩薩像・石山寺観音菩薩像・野洲町報恩寺観音菩薩像を挙げることができますが、石山寺像は徳川綱吉の生母桂昌院が石山寺に寄進し、報恩寺像は領主広幡家が宝暦十年（1760）に報恩寺に寄進したもので、古来から近江に伝えられたものではありません。慈眼寺像はその伝来史料を持ちませんが、どうも蒲生野に所在した廃寺の旧仏と推考できます。仏体・台座を一鑄した金銅像で、頭には三面頭飾、胸前ま

た両肩より膝前にかけての瓔珞は、典型的な隋様を源流とする小観音菩薩像です。白鳳時代は小金銅仏の遺像が多く、いま東京国立博物館所管になる四十八体仏は最も代表的な作例です。それらの銘記のあるものから推測すると、造立者が有縁の亡き人の菩提を弔うための造像が主となっています。わが国、初期の仏教受容形態は仏教本来の性格でなく、仏教は病気などをいやす呪力があると信じ、その呪力に大きく期待を持ち、また諸臣らは君親のために仏舎を造るという思想が主力を占めていました。このことは法隆寺金堂本尊光背銘によってもよく分りますが、仏教はわが国固有信仰の祈禱教的な要素や、祖先崇拜などと結合し、いわば民族宗教的に受容されたものです。近江の白鳳寺院址もこのような宗教観の上に立って、天武天皇十四年（685）三月に発せられた詔に刺戟されて多くの建立を見たのでしょうか。天武天皇はその十四年三月に「諸国の家毎に仏舎を作りて、乃ち仏の像と経を置き、以て礼拝供養せよ」と宣われています。これは国家仏教成立の端緒ともなるべきものでありました。

近江の白鳳寺院址は在地豪族によって建立された寺院ですが、天武朝より先だつ寺院として崇福寺があります。天智天皇七年（668）に建立され、天平元年八月（729）には官寺となっています。金堂には弥勒丈六に脇侍二菩薩、講堂に薬師仏ならびに脇侍二菩薩像、小金堂に阿弥陀三尊、三重塔に四方仏が安置されたということですが、三重塔の仏舎利とその容器（近江神宮蔵）のほかは遺存しません。

文献で知られる崇福寺金堂弥勒像こそは、近江寺院の最初を飾る本格的な造仏でした。官寺として奈良本期（天平時代）に造像された彫像は甲賀寺盧舎那仏と、官寺的な要素で造像された石山寺如意輪観音像です。紫香樂京の造営を企てた聖武天皇は、天平十五年（743）十月、紫香樂京で大仏造立発願の詔を出されました。翌年十一月には甲賀寺にて大仏の体骨柱を建て、天皇は親しく臨み、自らその縄を引かれたと『続日本紀』には記されています。しかし大仏未完のうちに紫香樂京は廃京となり、製作中の諸仏は奈良の金光明寺（東大寺法華堂）に移され、建物の一部は建立中の石山寺に移されました。石山寺は平城京の副都として、天平宝字三年（758）十一月計画された保良宮に伴なって造立されました。保良宮へは淳仁天皇・孝謙太上天皇の行幸もあり、石山寺の工事着手も淳仁天皇行幸の期間に置かれています。石山寺造営工事は造東大寺司主典安都雄足が事に当り、要する諸経費、工匠は造東大寺司に仰ぎました。金堂の本尊は丈六の塑像如意輪観音像で、如意輪観音は密教の尊像であるだけに、奈良時代新将来の雑密観音像として興味がもたれます。現石山寺の主尊は承暦二年（1078）正月、本堂炎上後に再興になった如意輪観音ですが、二臂半跏の像で、像容は石山寺創建当初の奈良時代雑密如意輪観音像の形姿をよく踏襲して、奈良県岡寺の奈良時代如意輪と共に注目されます。

奈良時代の遺作では善水寺誕生釈迦像、聖衆来迎寺薬師如来像、ともに小金銅仏ではあるが秀でたもので、特に善水寺誕生釈迦は東大寺誕生釈迦と共に奈良時代誕生仏の双壁をなす遺像です。また湖北の鶏足寺薬師如来像、十二神將像は奈良末期に造像されており、十二神將は薬師の護法像で、同時一具作であります。造立の経緯など分かりませんが、己高山上に所在した観音寺の里寺の一院、法華寺の主尊で、のち同じ里寺鶏足寺の管理下にな



鶏足寺 薬師如来像(奈良時代)

りました。薬師如来像は木造の立像で、像高184センチ、軀は肥満し特に両股は肥大してこの像を特色づけ、着衣の衣褶は写実的で、このころのブロンズ像の衣褶に通じるものがあります。この薬師像に配祀された十二神將像は木心乾漆像で、いまは十二軀のうち三軀

だけが遺存しています。木心乾漆は脱乾漆におくれて奈良時代中ごろに現われ、平安初頭まで残存します。しかし、時代が進むにつれて乾漆層が薄くなる傾向が見られます。鶏足寺像の乾漆は厚く木心を覆っていて、奈良時代末期の木心乾漆の典型をなすものです。乾漆の仏は都を中心とする文化圏に所在しますが、遠く都を離れた湖北に所在するのは珍しいです。しかも2メートルに近い堂々とした薬師如来像と、それを囲繞する乾漆の十二神將を具備する薬師堂の寺院がこの地に所在したことは、その背後にあった檀越の経済基盤と権力を思い浮かべさせられます。

八世紀末、平安遷都が行われると、最澄・空海によって仏教の大きな変革が見られました。天台・真言、両密教です。奈良時代は都市仏教で山林修行を禁じましたが、桓武天皇の父、光仁天皇が即位すると山林修行の禁を解き、山居僧をあたたく迎えいれました。最澄・空海とともに山林修行を強く提唱した僧で、最澄は子弟育成に十二年の籠山を主張し、空海また高野山に金剛峯寺を設けています。このころの彫像は密教の森厳さを強く受け、重厚な鋭い風貌の仏が多くあります。平安初頭すなわち九世紀を貞観時代とも称されますが、このころは彫像に三様の流れがありました。官營造仏所系と檀像様と中唐様の更新された様式です。官營造仏系は東寺講堂諸尊によって代表され、檀像様は法華寺十一面観音像、中唐様の更新は神護寺薬師如来像が代表作です。貞観彫刻で近江で先ず述べなくてはならないものは、向源寺十一面観音像です。宝髻より台座の蓮肉に至るまで一木で彫成し、頭髮は乾漆を盛って毛筋を刻み、天冠台上方に大型の菩薩の变化面を渦高く植えつけ、裔の褶は翻皮式を用い、盛唐様を多分に残した密教図像の影響を受けた、円熟の極地に達した、九世紀盛期の中央仏師の作です。高月町日吉神社（赤後寺）の千手観音像も特異な貞観彫刻で、漆箔の下地の漆が厚く、作

技に木心乾漆の技法があり、注目が持たれます。

寛平六年（894）菅原道眞の遣唐使派遣中止の建議がもちいられ、遣唐使が廃止されると、これまで長く大陸文化のもとに展開をみた仏教美術は国風化の胎動をはじめることになります。十世紀こそは日本彫刻史の和風化の陣



向源寺 十一面観音像(平安時代)



善水寺 薬師如来像 正暦四年(993)

痛どきでありました。善水寺の本尊薬師如来像、それを取りまく梵天・帝釈天・四天王像は正暦四年(993)の造像で、十世紀の基礎資料の少ないなかの一つとして日本彫刻史上重要な位置付を持つ諸尊です。一木内削りで、衣文には茶杓形の翻波を彫出し、翻波の終末の様式を示し、顔の風貌など温和となって、十世紀初頭までみられた密教様の厳しさが薄らいでいます。丁度円仁によって移植された法照流の五会念仏が、天台浄土教として確立するのもこのころでした。

源信は寛和元年(985)『往生要集』を著し、慶滋保胤は『日本往生極楽記』をこのころ著しています。源信の説く念仏は観想念仏であって、念仏を誦する場合つねに心に阿弥陀浄土を想起しておらねばならないというのです。この観想念仏思想は平安後半期の仏教彫刻を大きく支配しました。定朝の温和な阿弥陀如来こそは、その最も理想とした彫像で、当時の公家の日記のなかに、定朝作の阿弥陀如来は仏の本様であると述べ、阿弥陀堂本尊造立については、定朝以後の仏師は再々と定朝作

の阿弥陀像の細部に至るまでの法量を測定しています。また、王族・貴族たちの造寺造仏の盛行は、十一世紀ごろに寄木内削りの技法を完結しました。これは木彫像の技術的な大成で、いままで御衣木に束縛された彫像の法量が、寄木によって自由に丈六像を安易に造像できるようになったのです。石馬寺阿弥陀如来像、西教寺本尊阿弥陀如来像、長寿寺阿弥陀如来像、浄厳院阿弥陀如来像、中主町仏性寺阿弥陀如来像などはいずれも近江伝存平安後期の定朝様の丈六阿弥陀像です。

平安後半期の造仏は、傑出した仏師定朝の様式を踏襲したあまり、かえって形式化し、沈滞化しました。この風潮を大きく変革したのが、鎌倉初頭の運慶・快慶です。近江には運慶の作こそありませんが、快慶の遺作は石山寺多宝塔本尊大日如来像・彦根市圓常寺阿弥陀如来像、快慶様として弟子栄快の長命寺地藏菩薩像、行快の菅浦阿弥陀寺阿弥陀如来像、また、運慶様では作者はわかりませんが栗東町大宝神社の狛犬があります。

滋賀文化財教室シリーズ No.165号

発行年月日 1997年1月16日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525